
お約束研究会

土曜日の朝刊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お約束研究会

【Nコード】

N8265W

【作者名】

土曜日の朝刊

【あらすじ】

平凡でこれといった特徴もない、ありがちな設定の主人公の男子高校生。

ヒロインは主人公の幼馴染というよくある設定。友達は絵に描いたような優等生。

極めつけはクールで無口な無表情少女というどこかで聞いたようなキャラ。

そんなお約束が服を着て歩いているような彼らが“お約束”について追求する！ 第四の壁？ なにそれおいしいの？

登場人物紹介なんて無くても読める小説が理想（前書き）

といつつやっちゃうのが三流作家のサガです。

最初から見てもいいし後から設定思い出すために見てもいいです。

登場人物紹介なんて無くても読める小説が理想

佐倉裕貴 さくら ゆうき

“お約束研究会”二人目の部員。

事なかれ主義で口癖は「やれやれ」。平凡で特にこれと言った特徴もとりえもない。……というありきたりなくよくいる主人公。高校一年生。自分の設定のあまりの陳腐さにうんざりしている。

また、この小説のありがちなお約束を一番に嫌っている人物でもある。

吉村美並 よしむら みなみ

“お約束研究会”一応部長。というか、研究会を作った張本人であり幼馴染である裕貴をこの研究会に引っ張り込んだのも彼女である。

ツインテールでツンデレ、貧乳である事を気にしているというありきたりな設定だが、本人はそれほど気にしていない。目標はお約束やありきたりのない究極の小説を完成させる事。

桐山透 きりやま とう

お約束研究会員で真面目で冷静で万能。ストイックな性格で成績も優秀。スポーツ万能。非の打ち所のないよくいる優等生キャラ。

野上静香 のがみ しずか

最後の部員。無口で無表情などこかで聞いた事があるような設定の少女。たまに口を開けば的確で鋭い指摘をする。何を考えているのかわからない、端的に言えば長門ポジション。

プロローグの名のもとに設定を説明しようか（前書き）

むしゃくしゃしてやりました。反省をしてません。

小説というのもおこがましいです。ギャグ小説のつもりでやったのがこのザマです。

でも読んでくれる人がいましたら、本当にありがとうございます。

プロローグの名のもとに設定を説明しようか

こんなアホなタイトルにして釣られて読んでくれる人がいると思
ったら大間違いだ――

おれはそう言いたかったね。もちろんこの小説の作者に。

いまどきどんなに奇抜なタイトルにして読者の興味を惹こうとし
たって無駄だ。考える事はみんな一緒だからな。他にも似たような
タイトルがいくらでもあるわけだ。

「なにいきなり楽屋ネタかましてんのよ。つーか、あんたの愚痴っ
ぱいモノローグなんて聞いてたら耳が腐り落ちるから話を進めてく
んない」

「うるせーな。こういう小説なんだよ」

なーんて、開始から数行目でいきなり文句を言うてくる生意気な
この女。

おれの幼馴染であり、同級生である吉村美並だ。よしむら みなみ

うわっ、出たよ幼馴染。なんつうありきたりな、なんて思わない
で読んでくれよ。

おれだって好きでこんな奴と幼馴染になったんじゃないぞ。作者
が低脳だから幼馴染以外に気のきいた設定を思いつかなかっただけ
だ。

少し赤みがかった茶髪のツインテールをなびかせ、顔はヒロイン
なんだから当たり前だろと言わんばかりに可愛らしく、貧乳を気に
する幼馴染少女。

吐き気がする程に陳腐な設定だと思わないか？

「美並の設定の説明終わった？」

「お前も“説明”とか言うなまじで頼むから。これ以上この小説に

楽屋ネタを増やしたらますます低脳呼ばわりされる」

「自分がさんざんやっておいてそれ？ いいのよ、プロローグなんてちよつとかつこよさげな名前だけど、結局は設定を説明するだけだから」

「なんちゅう事言っただよお前。おれが見たところ、プロローグは何種類かに分けられるぞ」

「へー、考えてんだね一応」

「まずお前が言った“設定を説明する型”。これはファンタジーに多いから本来こういう学園モノに使われる事はあんましないんだけど……そこは作者の頭が残念って事で触れないでおく」

「他には？」

「あんま期待するような目をして訊かないでくれ。おれも適当に考えただけだから的外れなんだ、こんなもんは。強いて言うなら、面白い話を先にやっちゃう、って感じのやつかな。うまく説明できないけど」

「よくわかんない」

「たとえばファンタジーだったら、主人公が勇者になった経緯やその他の登場人物との関係、世界観の説明、そういうのを全部すつとばして、まず勇者が敵をぶつ殺すシーンから始めるんだ。そこで読者を惹きつけて、一話から改めて設定を説明するパターン」

「ふーん、なるほどね……」

「あー、あとはミステリなんかだと、被害者のモノローグだったりするよな。プロローグって。被害者が死ぬ前の生活がちよつと描写されててさ。本編に入るとそいつは殺されたり」

「あー、あるある」

まあ、今まで言ったのは本当にぜーんぶ適当に言っただけだから、あんまり真に受けられても困るんだけどな。一気に喋ったから疲れたわ。

「なにぼさつとしてんのよ。まだこの小説には説明しなきゃいけない設定がいっぱいあんでしょうが」

「うるっせーな。あんま説明説明連呼すんなよ。読んでももらえなくなるだろ。それとなく、自然に設定を説明するんだよ」

「そもそもあんた、自分の名前すら言ってないじゃん」

申し遅れました、おれの名前は佐倉裕貴さくら ゆうきです。（これでいいんだろ）

多分読者は予想してると思うが、これといった長所も特技も特徴もない平凡な男子高校生……という設定。奔放なヒロインに振り回される苦勞人……という設定。

ああ、うんざりだ、この陳腐すぎる設定。死んでもっと斬新なキヤラに転生したい。正直こうしてモノローグをやっているだけで恥ずかしいんだが。

タイトルを読めばわかると思うが、この物語の舞台となるのは……

「いやタイトル読んでもわかるわけないでしょうが」

「ちょ、うるせーよお前。モノローグに割り込んでくんな」

えー、失敬。タイトルを読めばわかると思うが、これは約束研究会のお話だ。

物語に出てくるお約束をひたすら追求して、お約束が出来るだけない究極の小説を追いつめる研究会。それがお約束研究会だ。

色んな漫画やアニメや小説を読み漁った美並が、ありきたりに嫌気がさして衝動的につくった部だ。

おれは幼馴染だからか、強制的にここに入部させられて、部長はあいつ、副部長は二番目に入ったおれ、って事になってる。

まあ、うちの高校は勝手に研究会も部もつくれないから、非公式だけど。部費も必要ないし、教室も余ってるし、誰にも迷惑かけてないし、そもそも大した活動じゃないしな。

要するに……大丈夫だ、問題ない。

って事さ。設定的には、一番いい設定を頼む、って話だが。妙な部活あるいは研究会をつくってそこで活動する話、なんてのはそれこそ、うなる程あるわけだ。それが作者にはわかってるのかね？

「さりげなく舞台が“高校”って事をアピールしたわね」

「こういうさりげなさが重要なんだよ」

もつとも説明説明連呼しちゃったからには手遅れ感が半端じゃないが。

「わざとらしいのよ」

いちいち文句が多いなこいつ。あんま固い事言わないで欲しい。しょせん“小説家になろう”のマイナー作家の書く小説のクオリティなんてこんなもんだよ。

上質な物語が読みたければ小説を買えばいいじゃん、ただし赤川。郎や山田。介は除くが。

「あんた赤川さんデイスってんの？」

「だってあれは……下手なライトノベルよりライトだと思うぞ」

「別にエルだろうがライトだろうが面白ければいいでしょ。山田。介みたいになくもないのにライトなのはマズいけど……」

「ライトというより日本語じゃな……おや、誰か来たようだ」

「句点の使い方のお話。」

美並^{みなみ}が家から部屋に無断で持ち込んだノートパソコンを食い入るように睨み付けている。

ていうかそれ、おれのなんですけどね。

「ノートパソコンをそんなに睨みつけてもバナナは出てこないぞ」「わかつとるわ。ていうかあたしバナナが好きだなんて言っていないし！」

「なんか好きそうな顔して……」

言い切る前に奴の右フックがおれの顔面を襲った。

この女相手に調子にのって軽口を叩きすぎるところなる事は長年の付き合いからわかってたはずなのになあ。

「で、なにを見てたんだよ。おれのパソコンにB L Eロ画像とか保存したりしないでくれよ」

「んな事してないわよ。あたしはインターネットよりも生の本で……ってそういう事じゃなくてね。小説家になろうってサイトで人気の小説を読んだのよ」

「はあん、そうなんだ。どうよ、面白かったか」

「それが全然面白くないんだこれが。ってのは言いすぎだとしても、ランキング上位の小説を読んだらどうも既視感がさあ」

「ありきたりだって言いたいわけか」

「身もふたもない言い方をするとそうなの」

そもそもこの研究会自体、ありきたりとお約束を研究するための会だからなあ。“なるう”のランキング上位の小説を読んでおくのはいい事かもしれない。

「けど美並よ。“ありきたり”な事と“王道”な事は似て非なるものだ。ありきたりな物語は見て面白くもなんともないけど、王道でも面白い物語はあるんだぜ。漫画だと、ダイの大冒険とかさ」

「そりゃそーよ。でも、なるうの……いや、ネット小説の人気作品ってやっぱりありきたりだよ」

「まあな」

「作者が必死に奇をてらおうとしてるトコがむしろ痛々しいの。『ほづら、こんな斬新な設定は誰も思いつかないだろう』っていう意図が透けて見えるっていうか」

「で、考える事はみんな一緒だったりして、結局ありきたりになるって話だろ？　そうなるぐらいなら最初から王道をつっぱしたほうがいいよな」

そんな話をしていたら、部室のドアが乾いた音を立てて開いた。

そこから顔を出したのは、爽やかな黒髪の短髪に銀縁の眼鏡をかけた忌むべき……もとい羨ましい限りなイケメンで、この小説の優等生キャラ担当である男子生徒、きりやま桐山透だ。

「遅れてすまない。HRが長引いたんだ。」

「ああ、気にしないでいい。言ってるだろ？　毎日無理して来る事ないって。ここベツに大した活動してるわけじゃないからな。単に放課後、家に帰るのも嫌だけどダラダラしたいって思って美並がつくった研究会だから」

「その割に君は随分熱心に活動しているように見えるが。」

「まー、一応な。でもお前は塾とかも忙しいだろうし、こんなくだらない事に付き合わせるのも申し訳なくてよ」

「ちよつとー、くだらないとは何よくくだらないとは。あたしはこの研究会で研究した事をもとに、究極の小説を書いて文芸部の連中の度肝を抜く事が夢なんだから」

美並がクチをはさんでくる。なんだよ、究極の小説って。あほかこいつ。

「それより、何の話をしていたんだ？ 教えてくれよ。」

「小説家になろう」ってサイトのランキング上位の小説はありきたりな設定の小説が多いって話よ」

「ありきたり……言われてみればそうかもしれない。似たような設定の小説が、他にいくらでもありそうなものばかりが上位にあるように感じる。」

「でっしょー？ でもね、多分上位の人をありきたり呼ばわりするのは可哀想だと思うの。だって、上位の人がありきたりに見えるのは、それを真似した人たちがいっぱい出てきたからで、結果上位の人みたいな設定の小説があふれかえったのよ」

「……なるほど。流石は部長だ、しっかり考えている。」

桐山はそう言って部長である美並に感心していた。そして、その後も自分なりに意見を出してみようとしたのか、立ったまま腕を組んで考え込んでいる。

彼はおれが「まあ、かけろよ」と声をかけて、やっと椅子に座った。

何事にも真剣に取り組んでくれる人の良い奴だ、彼は。多分“超”が百回はつくほど真面目な人だ。

成績は学年の人数が二百五十人近くいるこの学校でも常に十位以内は確実にキープしていて、三位以内に食い込む事だって少なくない。その上、近所の道場に通っている生粋の剣道家。

誠実すぎる性格からか、近寄りがたい雰囲気身をまとい、クラスから浮いてしまうのがタマにキズ。

→ここまでテンプレ

よくもまあ作者もここまでステレオタイプな優等生キャラな設定

にしたもんだ。学園モノの物語だったらこんなキャラは吐いて捨てる程いるっての。低脳を通り越して無能だよ作者は。

「どうした佐倉。顔色が優れないが。」

「いや、何でもない……それより、前々から気になってたんだけど桐山に訊きたい事があるんだ」

「訊きたいこと？」

そう、それはおれが彼がこの小説で発言してからずっと気になっていた事だ。明らかにこいつが、この三人の中で浮いている“違和感”。それは……

「桐山。どうしてお前のセリフだけカギカッコの最後に句点があるんだ？」

「句点？ 俺のセリフの最後に句点があるのか。」

「言ってるそばからつけてるじゃん！ 普通つけないもんだぞ」

「あー、そういえば桐山くん、いつも句点つけてるね！」

今まで気がついてなかったのか、こいつ。めざとい読者は多分桐山がセリフを言った瞬間気がついただろうよ。

最近の小説はカギカッコの最後には句点をつけないのがメジャーだからな。いまどき「HRが長引いたんだ。」なんて、ちよつと見ただけでも軽く違和感を感じる。それがネット小説ならなおさらだ。桐山は手をコメカミにやり、指でとんとん頭を叩き始めた。彼が考え事をするときの癖だ。

「確かに最初は句点をつけるのは今や不自然じゃないかと思っただんだ。でも俺は小学校の頃はカギカッコの最後には句点をつけるのが正しいだと習ったし、昔の文豪の小説には句点はついてる。だから、句点をつける事にしたんだ。」

「うーん、言われてみれば確かにおれもそう習ったな。何故か今の小説家はみんなつけないけど」

しかし小学校の頃に習った決まりを今でも貫き通すとは流石堅物真面目優等生キヤラ。

律儀つつーか、融通が利かないというか。

美並が突然机に両手をついて身を乗り出して言った。

「って、じゃあ句点をつけるのは間違いじゃないってわけっ？」

「うん。今はつけないのがメジャーってだけで、別に間違いというワケではないんだ。」

「そ、そうだったの……」

がつくし、という音が聞こえてきそうな程に肩を落とした美並は、ため息をつきながら席についた。

「なんだ、何か句点の事でトラウマでもあんのか？」

「いやね……前に“小説家になろう”に小説を投稿してみた事があるんだけどさ。」

「いきなり取ってつけたように句点つけなくていいぞ」

「はいはいわかったわよ。で、感想が欲しいからyahoo!の知恵袋に投稿した小説のURLを載せてアドバイスとかもらおうと思っただけよ。したら、なんて回答がきたと思う？」

「あつ……もしかして」

「そう。その回答者、自信満々に『まず小説を書く際の基本的なルールが出来ていません。カギカッコの最後には句点はつけませんよ』だなんて言うのよ。あたし、その回答みて軽くショックだったのに」「ああ……いるよな、間違った事をドヤ顔で回答する回答者は。特に小説のカテゴリに多い」

まあ、ドヤ顔かどうかはネットだからわからないんだけど、絶対ドヤ顔だろこいつ、って回答があるんだよこれが。

「その回答者のマイページ見てみたら、『小説についてのアドバイスを中心に回答しています』だなんてあつてさ。そいつの他の回答見てみたら『知恵袋に小説のアドバイスを求める人には面白い共通点があります。それは、初歩的な文章のルールが出来ていないものがあまりにも多すぎる事です。あなたの小説もそうですね』だって！許せると思う？」

「殺してやりたいね。まるで自分が小説を書く人の中で一番偉いんだあ、って言われてるみたいで」

そんなこんなで、話題はいつの間にかyahoo知恵袋愚痴にシフトしていた。あれ？いいのか？

「そっいえば何の話してたんだっけ？」
「忘れた」

何で異世界ファンタジー小説が多いんだろうね（前書き）

前回から間が空いているようですが、基本こんなマイペース更新になると思います。

何で異世界ファンタジー小説が多いんだろうね

美並とyahoo！知恵袋の悪質な釣り質問に対する愚痴で盛り上がったとき、がらんと教室のドアが開いた。

しつとりとした黒髪のショートカットの小柄な女子が顔を覗かせた。無表情で。↑ここ重要。

彼女は眉ひとつ動かさずに部室の扉を閉め、最小限の無駄のない動きで空いている椅子にちょこんと座った。

四人目の、もとい最後の部員である野上静香^{のがみしずか}が入ってきたのだ。

「……………」

無言である。

さあ、ここまで言えば察しの良い読者はお気付きだろう。そう、彼女はこの小説の無口無表情クーデレ要員であり、長門。希ポジションである！

作者の独創性の無さといったらもう、そろそろ著作権侵害で訴えられてもいいんじゃないか、ってくらいだろ、おい。

この小説の登場人物で誰か一人でもステレオタイプじゃないキャラがいたか！？ おれを含めて。

まあそれはそうと、彼女が来たことでこの部室も静まった。というか、ただおれと美並が黙っただけなんだが、それがキツカケで思いついた。

yahoo知恵袋の話とか句点の話とかですっかり忘れていたが、“小説家になろう”のありきたり小説の話をしていたんじゃないかっけ？

「そうよ！ その話をしてたのよ」

美並が叫ぶ。お前のせいで忘れてたんだよ。

「具体的にありきたりな設定っていうのはどういふものがあるんだ。」

「うーん……」

正直この小説の設定こそありきたりの中のあるべきところだと思いが……それは言っちゃいけないんだろうな。

「裕貴はどう思う？」

美並がおれにふってきた。ありきたりな設定ねえ……言われれば「そうそう」ってなるけど、訊かれると意外と出てこない。

考えてもよくわからないので美並からパソコンを奪い返して、ランキング上位の小説を読む。

うーん。美並の言うとおりの既視感……。

しかし、ランキング上位の小説と中堅あたりの小説を比べると、上位の小説には“王道”、中堅は“ありきたり”な印象を受ける。上位にも陳腐な設定もあるが、きちんと王道を行くものが多い。

まずいのは中堅あたりだろう。下手に奇をてらうあまり王道からも外れ、その上結局は他に同じ考えの人が多すぎて邪道にもなりきれず、ただ“ありきたり”なだけの設定が多い。

ま、おれらに言われたくはないだろうが。

ふと気がつくと後ろに野上が立っていた。気配もなく後ろに立つなよなあ……びっくりするから。なんて思いながら振り返るおれには目もくれず、ノートパソコンの小説を見つめている。

「……………」

無言。いくら長門ポジションでも、登場シーンから一言も喋って

ないって勘弁してほしい。

「何か気がついた事でもあるのか？」

「……異世界モノのファンタジーが多い」

「え？ ……あつ」

言われてみればランキング上位の小説はファンタジー一色。っていうか、そもそも連載されている小説はほとんどファンタジーじゃないか。

「言われてみればたしかにそうだな。」

「うん、たしかに！ ファンタジーばかりね！」

ははあ……どうりでこの超ありきたり小説の設定が“なるう”の上位小説には少ないはずだ。

これはたしかに陳腐極まりないアホ小説だが、ファンタジーではないからな。

「って、何でファンタジーが多いんだ？」と思わず誰へともなく疑問を投げかけたおれに

「多分、異世界ファンタジーモノは自分で世界観を作る事が出来るからだと思う。」と桐山が応えてくれた。

「えっ、どういうこと？」

「例えばミステリーを書くこうと思えば、当然舞台となる場所を調べておく必要がある。警察小説にするなら警察の事をよく調べておかないと物語は作れない。」

スポーツがメインになるならその協議について調べて知っておく必要があるし、SFを書くなら物理や化学に長けていなければ難しい。」

……一理ある。なんか遠まわしでわかりにくいが、異世界ファンタジーなら今桐山が言った面倒な点は全て無視できる。

世界観も細かいルールも全部自分で決める事ができるし、いざとなれば“実はそういう設定だったのだよ！”で全部すむ。

問題といえは元となる設定がない為に自分で全てを創らなければならぬ所だが、“小説家になろう”を含め、この世界にはテンプレとなる異世界ファンタジーは山ほどある。自分が出来そうな設定だけあちこちから拾ってくる事も可能なワケだ。

最悪、“ここはよくある剣と魔法のファンタジーの世界だ”の一言で設定の説明を済ませる事だつて出来なくはない。

そもそも異世界ファンタジーというだけで、誰しもがまずありふれたテンプレな世界観——例えばドラゴンクエストの世界のような——を想像するから、そもそもちゃんとした説明をする必要はなかったりするのだ。

説明をしなければいかに無理なく後付け設定をやりやすくなる。先の設定と矛盾する事を防げるからだ。

もちろんちゃんとした作家が書いたファンタジーはきちんと手抜きをする事なく世界観を読者に伝えるので異世界ファンタジーそのものを否定はしない。斬新で面白い世界観にする作家、設定自体はありふれていても描写を丁寧にして世界観を読者に近く感じさせてくれる作家、王道を進みながらも感動できる熱いストーリー展開をさせてくれる作家、と様々だ。

が、手を抜こうと思えばいくらでも手を抜けるジャンル、それが異世界ファンタジーなのである

「モノローグが長くて飽きるからここでカットするわね」

「ちょ……せつかくおれが必死に異世界ファンタジーについて熱く語ってたのに！」

「だ・か・ら！モノローグじゃ伝わらないでしょっ」

「読者には伝わるからいいんだよ」

「読者にんーなどうでもいい事伝えてどーすんの！」

やれやれ…… あっ、しまったこれは禁句だった。ただでさえ陳腐な設定のおれが“やれやれ”なんて口走ったらますますテンプレ通りのラノベ主人公になってしまう。

「って、ちょっと待てよ。」

「ん？ どうした？」

「さっきからずっとこの小説のありきたりさを心配しているが……この小説は異世界ファンタジーではないのだから、少なくとも“小説家になるう”ではありきたりの部類には入らないのではないか、と思ってな。」

「そーいえばそうね！ そうよ！ 勇貴は馬鹿みたいに神経質になつてるけど、そこまで心配する事はないんじゃないかしら」

何を言うかと思えば……こいつらまるでわかってないな。

「誰が何と言おうとこの小説の設定は陳腐極まりないありきたり小説だ。それは間違いない」

「そう？ でも異世界ファンタジーではないわけだしさ……」

「美並、たしかに“なろう”では異世界ファンタジーはメジャーなジャンルさ。でも異世界ファンタジーに次ぐメジャーなジャンルといえは、何だかわかるか？」

「えっ？ ……うーん……なんだろ……」

桐山の方を向くと、少し頭を傾けて考えていたがすぐに思いついたようだった。

野上といえは何を考えているのか、もしくは何も考えていないのか、眉ひとつ動かさずにひたすら沈黙を決め込んでいる。作者は会話文ばかりで場面の描写は真面目にやる気ないんだから喋らないと

空気になるよ、と教えてやりたい。

「学園モノ、って言いたいんだろう？ 佐倉は。」

「流石優等生キャラ、わかってるな」

「学園モノ？ ふーん、そういえばそっかー……」

「そう、学園モノだよ。何で学園モノが流行るかわかるだろ？ これまでの話を聞いてれば」

これでわからない、と言われたら誰のためにこんな馬鹿げた研究会に律儀に毎日行つてやつてるのかわからなくなる。

しかし美並もわかつたらしい。彼女はミステリを読みながら名探偵より先に答えを見つけたような顔で言った。

「学園モノ。つまり、登場人物は学生になるのね。学生と言えばよほどの事がない限りは誰しもが必ず通る道であり、小説を綴りながら感情移入もしやすい。」

しかも自分の母校もしくは現在通っている学校をモデルにすればいいから、警察小説とかのジャンルみたいに調べたり取材したりする必要もない。人生経験の少ない学生でも簡単に書く事が出来るからね。

学校つてのは特殊な場所だから“学園モノ”ってジャンルの出来事は学内で済む……つまり作者の経験内で書ける事が多い。それがメジャーな理由、でしょ！」

「よくできました」

つまり何が言いたいか、ってわかるだろ？

作者は相変わらずの低脳ばんくら野郎って事、さ。

設定の説明ばかりじゃ飽きるよね。話を進めろよ。

お約束研究会が部室だと言い張っている空き教室でしばし“お約束談義”をしていたおれたちだったが、そろそろ外も暗くなってきた気がする。壁にかかっている時計を見ると、そろそろ最終下校時刻だった。

この学校の最終下校時刻は今の時期は六時半という事だった。冬時間なら六時だが、幸か不幸か今は六月だ。六月？ 季節外れな小説だな、とか言ってはいけない。そもそも作者がこれを書こうと思ったのは実をいうとその頃なのだ。筆が遅すぎるって。

最終下校時刻は六時半だがクラブ活動で顧問が認めた場合はこの限りではない。が、お約束研究会は部ではない。当然顧問もいないし、そもそも研究会どころかおれら四人が勝手に集まってダベっているのを研究会だと言い張っているだけなのだ。

部長である美並に「そろそろ帰ろうぜ」と声をかけ、鞆を肩にかけて立ち上がった。

「そうね……でも何かまだ帰りたくないなあ。今日は」

「あん？」

美並や二人も鞆をかけて、帰る準備を始めていた。桐山が電気を消してくれて下駄箱に向かっているときに美並が言った。

「ねえ、この後みんなでマックでも寄ってかない？」

「はあ？」

下駄箱で靴を履き替えて帰る気満々だったおれは陰鬱いんうつな気分になった。

おれは早く帰って執筆中の小説を書き上げたいんだが……なんて

言っても聞かないんだろうな、こいつ。割とガチで書いてる“ノベリスト”ってタイトル学園小説なんだけどなあ……。

「みんなはどうだ？」と一応野上と桐山にも意見を求めた。

「あ、別にただ単に飯を食べに行くわけじゃないんだからね！ あれよ、最終下校時刻だから仕方なく場所を変えるけど、これは研究会の活動よつ。やっと話がのってきたっていうのに……ねっ」

美並が媚びるように揉み手で二人に言った。正直こいつはただ家に帰りたくないだけだろうとは思ったがあまりにも必死なので、ちよつと気の毒に思ってしまった自分が情けない。

「静香ちゃん、いい？」

と、野上に同意を求める美並。だから雨の日の捨て犬みたいな目やめろよ。

野上は「うん」と感情のこもっていない声で短く答えると、また沈黙した。感情がこもっていないと言っても決して“本当は嫌なのに”という意味ではなく、そもそも彼女の声に感情がこもる事が無いのだった。

時々彼女は何者なのだろうかと思う。まさかこの独創性の力ケラもない小説とはいえ宇宙人製のヒューマノイドなんて設定にするとはいえないし。

「桐山は？ いいのか？」

「研究会の活動の延長というのなら俺は構わないよ。ちよつどこのあいだ中間試験も終わったしな。」

「さっすが！ こんな熱心な部員を持って、あたしは誇りに思うわ！」

桐山はちよつと律儀すぎるぞお前。研究会の活動って言ったってただダベっているだけじゃないか。

「で、どうすんの？ 後はあんただけなんだけど」

と、おれの方を指差してにやにや笑っている。二人を味方につけてさぞやご満悦のようだが、味方なんていようとまいと、おれに拒否権があつた事なんて幼馴染だつた経験から言わせてもらえば、ない。

「わかつたよ。でもあいにく金なんて今ほとんどないぞ」

「言いだしつぺはあたしだしね、ここはみんなの分は奢つてあげる！ あ、でも一人二百円までね」

セコいんだか太っ腹なんだかわかりにくいが、こいつは小遣いには大して不自由していないのだ。

なにせ父親が今売れっ子の小説家なんだからな。よしむら純一吉村純一**といえ**ば、多少でも読書をする人間なら誰しもが知っているはずだ。

本格推理、学園青春、SFなど幅広い範囲のジャンルで活躍し、特に彼の本格推理小説はまさに“本格”の名にふさわしい正統派ミステリで、ミステリ愛好家からの評価も高い。

せつかなんでこの際美並んちの身の上を説明する事にしよう。嫌な事はまとめて終わらせるに限る。

前述した通り吉村純一は今人気の小説家であり彼女はその一人娘である。母親は彼女が幼い頃に病気で他界した。それ以来は美並と父親である純一は二人暮らしであるが、純一は母親が生きていた頃も小説の執筆活動が忙しくあまり美並に構つてやる事がなかったという。

そのせいか父娘の関係は必然的に冷え切つたものになっていき、

美並自身父親に良い印象を抱いてはいないようだった。美並は父親が自宅以外で執筆活動をする事が多く、家を空ける事も多い。

そんな美並が父親しかいない家に帰りたがらないのも当然といえば当然なのかもしれない。

と、またしてもありきたり設定乙。漫画とかラノベ主人公orヒロインの両親が死んだり行方不明だったりするパターンが多すぎる。実際そんな家庭がたくさんあるわけがないというのにだ。いかにラノベが現実を蔑ろにしているかがわかる。

文句のひとつでも言ってやろうかと思っていた矢先にマツクにたどり着いた。

この時間帯はおれらみたいに学校帰りに寄ってく学生や、そもそも学校に行くつもりのないヤンキーだのでそれなりに混んでいる。

注文は美並と桐山に任せて、おれと野上は席をとっておく事にした。

「裕貴何にすんの？」

「あー、えー、じゃあシェイクで」

「静香ちゃんは？」

「……私も」

そついい残すと、おれと野上は二階にある席に陣取った。……はいいが、そついいばおれと野上が一人で話す事なんてないぞ、気まずすぎる。

「……………」

もつとも野上はそんな気まずさをおれと共有するつもりは毛頭ない、と言わんばかりに無口無表情長門ポジションキャラの設定を忠実に守っている。

そもそも彼女はなぜこんな意味不明な研究会に籍を置いてくれて

いるのだろうか。

単に作者が無口キャラが欲しかった、ってだけの理由じゃないだろう。流石に。

だいたい彼女は何者なんだ。普通は宇宙人でもない限りここまで無口無表情って事はないぞ。実際。そんな女の子がいるのはライトノベルの世界だけだ。どんなに無口な女子だって、仲の良い女の子と話すときはそれなりに話すし、表情だってそれなりには変わるはずなんだ。

流石にここまで無口無表情だと現実世界にいるとコミュ障呼ばわりされるレベルだろう。そこらへんのリアリティもこの小説にも欠如している。作者はやはりボンクラなんだろうな。

つかやばいって、ただ設定説明してるだけでもう三千字近い。作者がそろそろ飽きる頃だぞこれ。今回だけ長くなっても不自然だし。

「ん、お待たせ」

と言って、お盆を持った美並と桐山が席に来了。

注文した通りおれと野上はシェイクで桐山がコーヒー。美並は…海老フィレオセット？

「そんなにがつつり食うのか」

「いーのよ。どうせ帰ってもロクな晩御飯が用意されてるわけじゃないんだから」

投げやりな表情で吐き捨てる美並を見て、おれはまた陰鬱な気分になる。

と、美並が顔を近づけて来て、小声で言った。

「……そんな事より、ここまで来る間に小説の設定を説明するだけ

したんでしょね？」

何を言うかと思えば、またそういうメタ発言か。モノローグでなくともかく発言にすると萎えるぞ。

「したよ」と短く答えて手元のシェイクを啜った。甘ったるい味が舌に広がり、喉を通り抜ける。これでは余計に喉が渴く。ウーロン茶にしなければよかったかな。

「ちよつと疑問に思ってたんだが。」

桐山がコーヒーを置いて言った。最後に句点がつくからこいつが喋ったときは一発でわかるなこれ。

「今回は大した進展も会話もなく、ひたすら設定を説明するばかりだったよな。これでは駄作と言われるのではないかと心配になっただけな。」

「安心しろ、この小説は駄作中の駄作だから胸をはれ！ 聞いてたかよ、今までの陳腐な設定を」

「設定の陳腐さはとりあえず置いておいて、だ。小説というのは設定を説明すればいいというものではない。スピーディーに話を進めて展開して膨らまさなければ読者は飽きる。小説の鉄則、と言ってもいい。」

言われてみれば、その通りだ。そういえば過去におれの小説の批評で言われた事がある。会話中心にスピーディーに話を進め、読者を飽きさせずに読ませ続けるようにしろ、小説は物語であって設定の説明じゃない――

「美並はどう思う」

「そうね……斬新な設定ならまだしも、この小説の設定を説明され

るのって苦痛極まりないだろうし」

お前それを言うなよ……そういう話じゃないし。

「だから設定の説明は程々にした方がいいと思う。」

「でも納得がいかねえんだ」

ああそうさ、今回は最初っから最後まで設定の説明会だよ。でもその何が駄目なのさ……？

「……………」

野上は依然黙ったまま。こうしてたまに目を向けてやらないと絶対に物語からフェードアウトするって、お前。

「おれはこれでも、人並み程かは分らんがそれなりには本を読んできた。設定の説明ばかりの話だってあったし、それでも読み進めた！ 何が悪いんだよ！」

「何をそんな憤^{いきどお}ってるのよ、あんたは」

「例えば、どんな小説を読んでいたんだ？」

「例えば？ そうだな……たとえば推理小説なんかには説明ばかりだろう。現場、トリックの説明はいいとして、人物の生い立ちや性格まで説明する作品だってあるさ。有栖川有栖の作品とかそうじゃないか？」

「火村英生、か。俺も少しなら読んだ事がある。」

「あたしはないかなあ、知ってるけど」

「野上は？」

「ある」

結構知ってるじゃないか。まあ結構有名だもんな、あの人も。有

栖川も好きだが正直言つて綾辻行人がさらに好き、でもあの人は有栖川ほど説明説明じゃないから黙っておくか。

「有栖川がどうかしたのかい。」

「ま、この流れでいけばわかると思うが……あの人も割と設定の説明的シーンは多いぜ。ある時は、“〳〵の経歴と人物を少し述べておこう”みたいな感じで説明宣言する事すらある。

何が言いたいかわかるな？　つまり、有栖川みたいにそれなりに名が売れている人でさえ設定の説明は当たり前前にやるんだよ。文句言われる筋合いなんてないってわけだ」

そこそこ説得力あるんじゃないのか、と自惚れながら思いながら熱弁を振るつた。そもそも推理小説は推理を楽しむものだから設定の説明なんざ何ら問題にはならないどころか当たり前なんだが、あえて言わないでおこう。

「そうね！　気にしないで問題ないんじゃないかしら」

「いや待て。そう簡単に決め付けていいのか。」

「妙に引つかかるな、桐山」

「たしかにそうさ、設定の説明が多くとも読める小説は読める……が、ネット小説ならどうだろうか。」

「どういう意味だ？」

「本で読むなら楽な姿勢で集中して読めるし、しおりを挟んで少しずつ読める。が、ネット小説は違うんじゃないかと思うんだ。」

「あつ、そうか。ずっとモニターの文字ばかりを追って読む作業は普通に本を読むよりも疲れるのよね。ただでさえ読むのが疲れるネット小説で説明ばかりじゃ飽きられる。そういう事ね、桐山くん？」

「ああ、そつだ。」

残念ながら反論の言葉が思い浮かばない。

つまりどういう事か、って説明ばかりの今回は最後まで読んでも
らえないって事ぞ。

ミステリ編、突入！（前書き）

今回からミステリーのお約束論がテーマになる予定です。

ミステリ編、突入！

「って、タイトルがいきなり意味不明だよ説明しろよ」

そう言っておれは部室の机を叩く。ミステリ編って何？ ナメてるの？

「まあ、落ち着きなさいよ裕貴。作者も淡々とお約束談義してるだけのこの小説の嫌気が差したのよ。今回からはミステリ風味な作品になるらしいの」

そうかそうか作者はミステリがやりたいのか、じゃあ今からおれが作者を殺しに行くから自殺ってオチでこの小説を完結させようじゃないか。

いきなりミステリ編？ ぶっ殺されたいの？

「野上もおかしいと思うだろう？ いきなりミステリー編に入るなんて」

「……………」

と、部室の隅っこでジョン・デイクスン・カーを読みながら相変わらず無口キャラに忠実な野上。

何を考えているのかわからないし、お前前回も完全に空気だったんだからマジで発言してくれ、頼む。

でもデイクスン・カーを読んでいる時点でその気は満々なのかもしれないと思っただ。デイクスン・カーといえば知る人ぞ知る推理小説作家で、特に密室モノが得意な巨匠だからな。

おれは実を言うとあまり好きじゃないんだけどな。海外ミステリ作家といえばおれはスー・グラフトン……

「はい、誰も聞いてないからね！ そんな事より、ミステリ編って言うからには何か事件が起こるはず……」

「おい！ 聞こえているだろう！ おい！」

突然、隣の教室から怒鳴り声が聞こえた。あそこは確か、ミステリー研究会だったはずだよ。↑後付設定。

ここじゃよく聞こえないので思い廊下に出る。他の部員三人も一緒だった。

するとミステリ研究会部である内田が、ミステリ研部室のドアをどンドン叩いているではないか。そのそばには他のミステリ研の部員もそろっていた。といつても、内田以外には部員は鮎川、西村、山村の三人だけなんだがな。部員の少なさじゃお約束研究会と肩を並べる…… っていうちは正式な部じゃなかったな。

「おい！ 開ける！ 開けてくれ、西村！」

「何があつたんだ？」

嫌な予感を感じつつも内田に尋ねる。いや、もうミステリ編なんだ、何が起こるかは明白だが。

「ああ、佐倉か…… 西村が部室に鍵をかけたまま眠っちゃったみたいだな。おれたち他の部員が中に入れないんだよ」

ドアの小窓を覗くと、西村が机に突っ伏して眠っているように見えた。

「ここの教室の鍵なら職員室の前に置いてあるじゃないか。それを使えばいいだけだろう。」

と桐山が意見を述べた。ごもつともだが、ここまでの前フリを考えるとそれは……

「見てみる」

内田がドアの小窓を指差して言った。覗いてみると、案の定その鍵は教室内に転がっている。

ここまで読んで、かつミステリ編がどうのこうのとのたまっているんだ。どんなアホでもここからの展開くらい予想がつく。

「そもそも、どうして鍵をかけたのよ？ しかも教室の鍵を持ち込んでんじやって。あれは移動教室のときの戸締りぐらいにしか使わないじゃない」

「おれに聞かないでくれ。西村は一体、何を考えているんだか……」

内田はうんざりしたような顔で言った。おれは思った。こいつ馬鹿か。タイトルも読めないのか。何が起こっているかなんて猿でもわかるのだ。

「おい、ぶち破るぞ」

「えっ」

「えっ、じゃないだろ。本気で奴が眠っているだけだとも思っているのか？ さっさと話を展開させたいんだ、お前もミステリ研の部員ならわかるだろ？」

さっ、と内田の顔から血の気が引く。やっとわかったか。

「そんな……まさか、そんなわけがない」

「恨むなら作者の無能さを恨むんだな。今はこの教室に入る事が先決だ」

ミステリ編突入のタイトル。そしてデイクスン・カー。ああ、作者はくたばれ。

お約束通りと言うべきか、おれと桐山と内田の三人の教室の扉に体当たりだ。三回ほど衝撃を与えた時点であっさりとドアは破れた。横開きのドアが何故体当たりで開くのだろうか。どうせ鍵がかかったドアといえば体当たりのイメージしかなかったんだろう、作者のアホには。

ドアを開けて中に入ると西村はやはり、机に突っ伏したまま死んでいた。あっさりしすぎていると思うだろうが、こんな事はドアをぶち破るまでもない。教室に鍵がかかっていた時点でまる分かりなのだ。

「西村……おい、西村！　しっかりしろ！　西村、西村——
——っ！」

内田が突っ伏している西村の肩をゆする。「ちょっといいか。」と桐山が西村の生死を確認するもやはり死んでいるらしかった。桐山は万能キャラだからこういうときに超便利。

「ねえ……本当に西村くんは死んでいるの？　別に体はなんともなさそうじゃない……寝ているだけじゃないの？」

山村が絞り出すような涙声で桐山に訊いた。山村はミステリ研の紅一点で、綺麗な茶髪のみディアムの可愛い女子だった。割と軽い感じでモノローグをやっていたが、この子にとっては西村は同じ部員の仲間だったのだから悲しむのも当然だった。

「残念だけど心臓が止まっているんだ。死斑も少しだが出ている。手があっさりと開いたから死後硬直はまだのようだ……」

桐山の言葉を最後まで聞く前に彼女はそれまで堪えていたものが崩れるように泣き始めた。

隣にいた鮎川も言葉もなく立ち尽くすのみだった。おれらもそうだ。常時無表情な野上は知らないが、美並も陰鬱な表情をしている。胃の奥が冷たくなるような感覚に襲われていたのは、おれだけではなく桐山もそうに違いない。

ミステリ編が始まるという事で覚悟はしていたが……やはり覚悟をすれば何とかなるはずでもない。冷たい胃の奥から寒気が広がっていき、体全体が凍りついたかのようにその場から動けなかった。

ミステリ編、突入！（後書き）

もう1、2話ミステリ編続くと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8265w/>

お約束研究会

2011年11月14日17時27分発行